

平城宮・京域出土旧石器の新資料

—第448次・第469次・第503次・第530次

1 はじめに

平城宮・京域の調査では、旧石器時代の遺物が少なからず出土することが知られる。この地域は基本的に沖積地であり、多くの場合、石器は原位置から遊離した状態で見つかるが、法華寺南遺跡のように沖積層下に包含層が残存していることもある¹⁾。すでに幾度か奈良盆地北部の旧石器時代資料が報告されているが²⁾、ここ約10年間にも資料数点の蓄積があった。ここで報告する4点は、すべて白色風化したサヌカイト製（推定二上山産）であり、技術的にも旧石器時代の石器と判断できるものである。以下、それぞれの石器の概要を記し、その位置づけについて考えてみたい。

2 資料の概要

図339の1は国府型ナイフ形石器。横長剥片を素材として一方の側辺全体にブランディングを施す。加工された縁辺は鋸歯状を呈し、素材剥片の打面は残らない。背面には石核のポジティブ面と先行する横長剥離痕が1つのみ認められることから、典型的な瀬戸内技法によるものと考えられる。先端部を欠損する。残存長6.90cm、最大幅2.47cm、最大厚1.16cm、重量19.02g。右京一条二坊四坪の旧秋篠川東岸粗砂（第530次調査）出土。

2は二次加工のある剥片。横長剥片を素材として、一方の側辺に二次加工を施す。加工された縁辺は鋸歯状を呈する。背面にはほぼ幅いっぱい横長剥離痕が残存する。最大長2.56cm、最大幅5.35cm、最大厚1.50cm、重量15.31g。平城宮東院地区（第469次調査）SB19350柱穴埋土出土。

3は、翼状剥片石核。剥離面から読み取れる剥離工程は以下のとおり。亜角礫からやや厚みのある板状剥片を剥離する。自然面に覆われた背面側を打面として、そこに打面調整を施したのち少なくとも3枚の翼状剥片を剥離する。剥離角は130～140°。最大高1.48cm、最大幅6.85cm、最大厚4.31cm、重量37.14g。右京三条一坊八坪（第448次調査）奈良時代整地土出土。

4は、翼状剥片。背面には石核面のポジティブ面と先

行する横長剥片剥離痕が1枚のみ認められる。打面に粗い調整を施す。両側辺は折損面である。最大長5.42cm、最大幅7.06cm、最大厚1.37cm、重量53.03g。平城宮東院地区の奈良時代整地土（第503次調査）出土。

3 資料の位置づけ

本報告資料は、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核、横長剥片素材の二次加工のある剥片である。これらのうち前3者は近畿、瀬戸内地域の後期旧石器時代後半期に特徴的な瀬戸内技法関連の石器であり、後者についても、技術的にみてそれと同時期のものと考えられる。これらは整地土や柱穴埋土から出土しており、あきらかに原位置から遊離している。ただし、石器の縁辺や剥離面のエッジはシャープに残存していることから、転磨を受けた状況ではなく、二次的な移動があったとしても大きく移動していないと考えられる。とすれば、平城宮域下層にも旧石器時代の遺跡が存在する可能性が高い。

奈良盆地北部ではすでに旧石器時代の資料が複数確認されており（図338）、立地や石器群の特徴として以下のことが指摘されている。遺跡が奈良盆地周縁に展開する丘陵から派生した中位段丘の一回り内側に分布すること、後期旧石器時代後半期を特徴づける国府型（系）石器群の一括資料が見つかっていないことである³⁾。今回の出土地点も、奈良山丘陵から派生する段丘縁辺に近い平城宮域付近であり、すべて単独資料であることもこれらの指摘を支持する。ここでは、これらに加えて平城宮東院地区や法華寺周辺で石器が集中的に見つかる傾向があることを指摘しておく。平城宮域は奈良時代の遺構保護の観点から、下層遺構に関しては調査機会が限定される。ただ、断割調査などで土壌堆積を知られる場合があり、こうした局面を通じて、いわゆる地山の性質や年代、堆積構造について、調査を進めていく必要がある。（芝康次郎）

註

- 1) 井上和人・金子裕之・佐川正敏・森本晋・大場正善『平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告 旧石器時代編』、奈文研、2003。
- 2) 松浦五輪美「奈良市内出土の旧石器について」『旧石器考古学』52、旧石器文化談話会、65-74頁、1996。光石鳴巳「奈良盆地の旧石器資料—近年の新出土事例を中心に—」『旧石器考古学』66、旧石器文化談話会、63-76頁、2005。
- 3) 註2)に同じ。

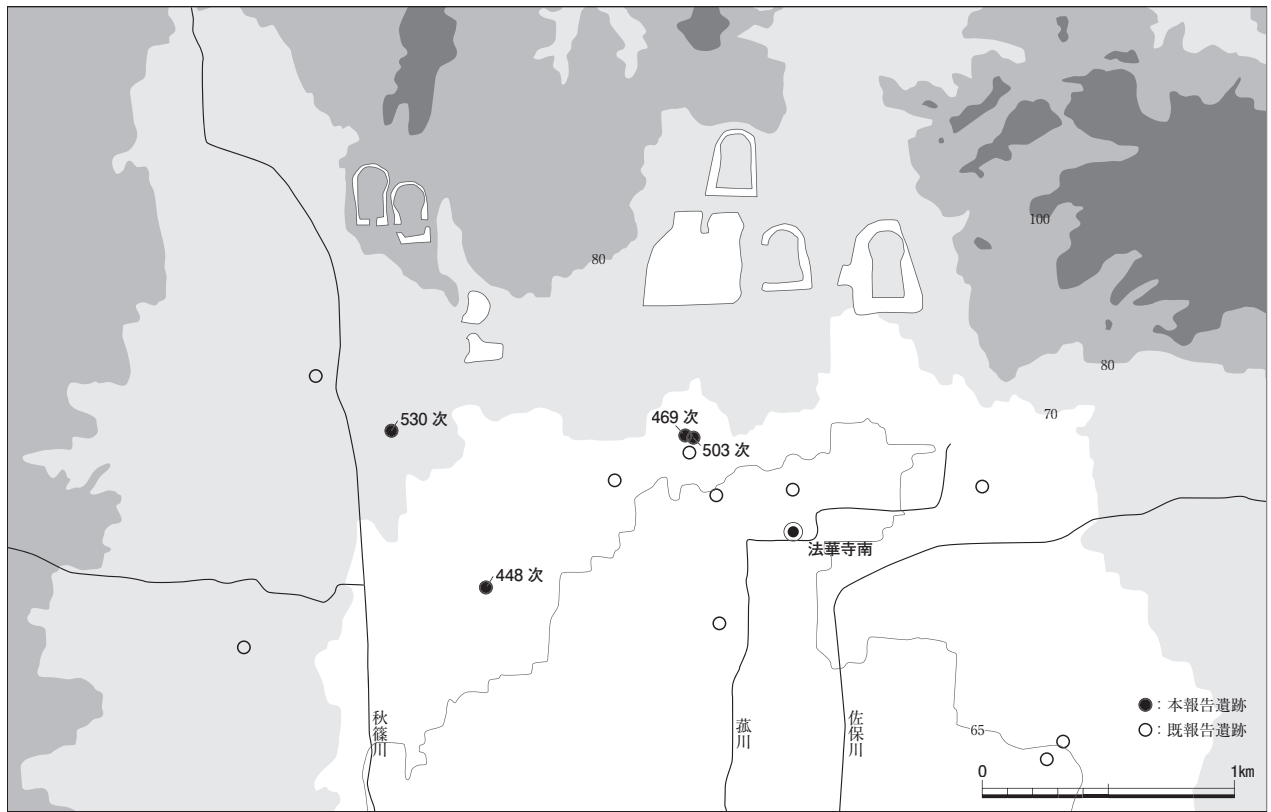


図338 奈良盆地北部の旧石器時代遺跡分布図 1 : 30000

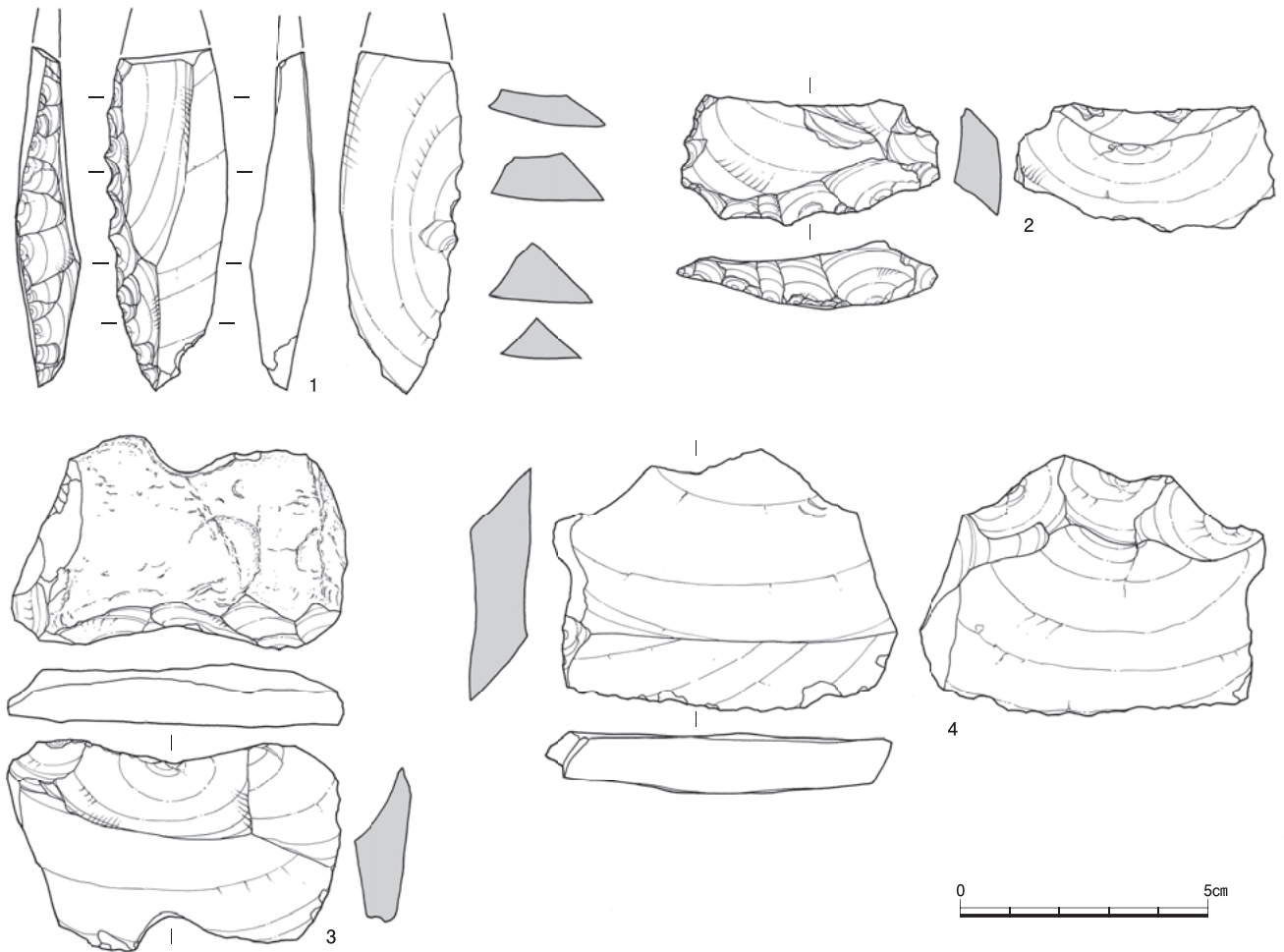


図339 平城宮・京城出土旧石器実測図 2 : 3